

10. 地域の特性を活かしたまちづくり

“かわまちづくり”と“みちまちづくり”

近年、“まちづくり”という言葉が聞く機会が増えていると思います。少子高齢化や人口減少に伴い、これまでのライフスタイルとは異なった思想や観点から、“まち”そのものを見直そうという動きが活発化しています。

しかし、一口に“まちづくり”と言っても、さまざまな要素、さまざまな観点があります。図1に当社が係わる可能性のあるまちづくりを示しましたが、これも多数ある“まちづくり”のほんの一部に過ぎません。いわば、千ヶ所の町があれば千件のまちづくりが、1万ヶ所の町があれば1万件のまちづくりが存在します。

そのなかから、ここでは当社の得意分野である河川と道路に焦点を当て、“かわまちづくり”と“みちまちづくり”を紹介します。

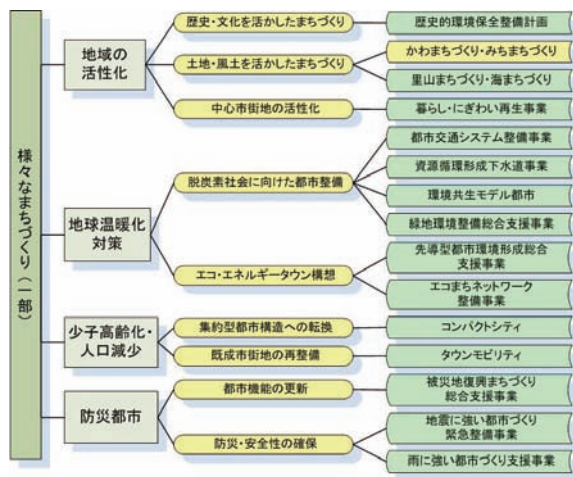


図1 さまざまなまちづくりの例

“かわまちづくり”へのこころみ

“かわまちづくり”とはちょっと聞き慣れない言葉かもしれませんが、この名称が用いられたまちづくりは、当社が秋田県雄物川で取り組んでいる事例が全国で3例目になります。川に関連するまちづくりはこれまでも各地で行われており、国外でも、韓国の清溪川(チョンゲチョン)再生事業の例をはじめ数多くあります。

見方を変えると、もともと人類が発祥したときから川と町は切っても切れない関係にありました。しかし、改めて“かわ”と“まちづくり”をそれぞれの観点で見直し、これを結びつけて地域を活性化しようという発想は、“かわまちづくり”が最初ではないかと思えます。

“秋田かわまちづくり”はすでにi-net(Vol.18)でも紹介しましたが、この“かわまちづくり”のおもしろいところは、地域住民が身近な存在である“川”の価値を再認識し、“川”を中心とした地域活性化を推し進めている点にあります。現在の日本では、清流と呼ばれるところは別かもしれませんが、身近にある川はあまり良い印象で語られることがありません。下水で汚染されていたり、洪水時には被害をもたらしたり、防護柵で囲まれていかにも危険な場所、といったような負のイメージが定着しているような

気がします。しかし、川で遊んだことのある人にとっては、川はもっと違った場所でした。そういった思い出を持った人たちが大勢集まって“秋田かわまちづくり”が生まれました。川の持つさまざまなおもしろさを再発見し、これを新しい地域づくりに役立てるといった発想は、どこか「温故知新」という教えにも似ているような気がしています。



写真1 みんなで知恵を出しあって新しい町が作られていく

かわまちづくりの今後

日本中、どこへ行っても川が流れていない町はありません。それぞれの町のそれぞれの川は、みなそれぞれ異なった顔を持っています。しかし、その顔の違いに気づいている人たちは、どのくらいいるのでしょうか。

当社には、日本の川を知り尽くした大勢のスタッフがいます。ある技術者は、川の氾濫を防ぐための技術を駆使して、物理的側面から川の特徴を捉えるのが得意です。またある技術者は、生物の生息環境の側面から川の生態系を探り出し、そういった環境を保全・再生する優れた技術を持っています。

このような技術を総動員してそれぞれの川が持っている特徴を明らかにし、その特徴を活かしたまちづくりをサポートしていくことが当社の使命であると考えています。たとえば、河川防災に配慮したかわまちづくり、河川景観を活かしたかわまちづくり、かわあそびや観光、スポーツなど、人々の利活用を考えたかわまちづくりなど、当社の技術を活かせるかわまちづくりは多岐にわたってあります。



写真2 川で遊ぶ子供たち

当社では、秋田かわまちづくりで培った技術をさらに発展させ、今後とも、いろいろな町のいろいろな川で、地域住民の方々とともに、川の持っている良い面を再発見したり、それを活かすための知恵を働かせたり、誰もが納得できるかわづくり、まちづくりに取り組んでまいります。

“みち”と“文化”

古来、“みち”は人々の生活や都市間の交易、物資の流通になくはならないものとして発達してきました。7～8世紀頃に造られた東海道・東山道・山陽道・山陰道・北陸道・南海道・西海道の七道は、都(みやこ)と国司や郡司地方都市を地勢に順応させながら最短距離で結ぶもので、現在の幹線道路の原型となっています。

平安時代以降、日本の中心として繁栄した京都には、全国からたくさんの方が集まり、そしてその都市活動を維持するために大量の食糧や物資が運ばれました。七道以外にも若狭から都へ海産物を運ぶための若狭街道や、巡礼の道としての熊野古道や伊勢街道などが造られ賑わいました。戦国時代には信長や秀吉によって行軍の道が造られ城下町が発展しました。江戸時代になると日本の中心は江戸に移り、五街道や脇街道などの参勤交代の道が整備され、宿場町が繁栄しました。

このように、“みち”はその時代の政策と密接に関係し、沿道には「宿場」ができて人々が行き交い、出会いの場として賑わいました。

“みち”は何百年と長い期間にわたって使われ続けてきた歴史から、地域の歴史を物語っているといえます。風土のなかで築かれた町並みや石垣、石畳などの街道景観は文化的価値としてもたいへん貴重なものです。街道景観や街道文化は地域にとって貴重な財産であり、その資源を次世代にまで引き継ぐとともに、観光資源として地域の活性化に活かしていくことが重要です。



写真3 街道から地域の歴史・文化を読み解く

“みちまちづくり”による地域活性化

今日では少子高齢化が進み、観光を中心とした地域再生に期待が寄せられています。地方には、都会にはない豊かな自然や伝統文化、コミュニティなどが今なお残されています。“みちまちづくり”は、沿道の地域住民との触れ合いを通じて、長い時間をかけて培われてきた地域の魅力や街道文化を感じてもらおうとするもので、交流人口を増やすことにより持続的な地域の発展を図ることを目指します。

“みちまちづくり”の道筋は、地域の方々といっしょに、普段、何気なく利用している“みち”について考えるところから始まります。街道の多くは現在も道路として利用されていますが、周辺には多くの観光資源が眠っている場合が珍しくありません。地域の歴史を紐解き地域資源の発掘を行うとともに、個性を磨き上げて探究心の旺盛な来訪者に感動と喜びを提供できるレベルまで地域の魅力・価値を高めることが大切です。地域の観光資源を活かすためのアイデア出しを行い、市民が共有できる観光魅力づくりのビジョンを設定します。そして、“来訪者の利便性・安全性に配慮した交通環境”や“観光客を誘客するための広報戦略”、“リピーターを増やすためのホスピタリティの向上”、“地場産業を活性化するための仕組みづくり”など、目標に向かっての具体的な取り組みについて検討を行います。

当社は、既存ストック(地域資源・人材・みち)の利活用に着眼し、「地域住民」が「地域資源」に愛着と誇りを持ち、「来訪者」は「地域資源」を通じて「地域住民」と触れ合うことができる魅力と活力あふれるまちづくりに取り組んでまいります。



写真4 市民参加による地域資源の発掘



図2 既存ストックの利活用による“みちまちづくり”